

古典派貨幣理論の前提*

佐藤有史（立教大学）

1. はじめに

シュンペーターはかつて、H.D. マクラウドによる自らへの影響に言及しつつ、「貨幣の信用理論」と「信用の貨幣理論」とを区別だてしたうえで、「貨幣の信用理論」のほうが好ましいと主張した（Schumpeter 1954, 717）。シュンペーターはこうした主張を十分に展開することもなかったし、マクラウドの諸著作のどの部分がどのように強い妥当性を有するかを示すこともなかった。だが、彼の書き方では、貨幣とは何より債権債務の清算手段であるという考えに同調しているようだ。こうした見方は両大戦間期以降、経済学者たちに徐々に浸透し、例えば、非金属的な貨幣への方向に進みつつあった R.G.ホートリーたちにも共有されたものと見なしうる¹⁾。

だが、貨幣に対するこうした見方には疑義がある。そうした見方は、債権債務の清算において信用手段を使用しえた^{あいたい}相対取引と、不特定多数を相手にする市場取引とを混同した議論である。古典派経済学者たちはこうした市場取引の本質に対する深い認識があったからこそ「信用の貨幣理論」を展開したのだ、というのが本報告の主旨である。

2. 市場取引

貨幣が存在する以前には、さまざまな信用手段が債権債務の支払手段として利用されてきたということには具体例に事欠かないし、これからも多くの知見が蓄積されていくことだろう。本報告は、そのこと自体について争おうというものではない。本報告が言いたいことは、それらはすべてが、当事者間ですでに信頼が形成されている「見知った人々（friends or acquaintances）」の間での^{あいたい}相対取引としての信用取引であったということだ。それらの取引をいくら足し算しても「市場取引」、すなわち不特定多数の「見知らぬ人々（strangers）」の間での取引にはなりえないのである。^{あいたい}相対的な信用取引と不特定多数の市場取引との間にある「経済的」飛躍の解明についてはこれから埋められるべき多くの事柄があるだろう（cf. Seabright 2010）。だが、「貨幣の信用理論」はこうした飛躍を無視している。

3. 古典派における貨幣の必然性の論理

アダム・スミスは、分業が全面的に開花した「商業的社会」（市場経済）においては、人々は圧倒的な生産性の上昇を享受する一方で、自ら必要とするものの圧倒的大部分を自分の

* 本報告は、科研費補助金基盤研究（B）課題番号 16H03602 による研究成果の一部である。

¹⁾ 'Money may be established as the means of discharging a debt by custom and not by statute, provided a court of law or other tribunal will recognize it.' (Hawtrey 1928, 15)

生産物との交換によって他者から入手しなくてはならない事実を示した²⁾。そこからスミスは、論理必然的に、市場経済においてはそうした生産物どうしの交換のルールを定める「交換価値の決定」論（＝価値論）の必要³⁾と、そしてまた、「欲望の二重の一致の困難」を解消する貨幣の存在の必要とが生じるのだと説き明かしたのである⁴⁾。

スミスにおける貨幣論の位置づけは、まさにこうした文脈において捉えられなくてはならない。スミスにおける「商業的社会」とは、まさに「見知らぬ人々 (strangers) の集合」にほかならず、「文明社会では、人はいつも多くの人たちの協力と援助を必要としているのに、全生涯を通じてわずか数人の友情を勝ち取るのがやっとなのである」(WNI.ii.2) からは、私たちは見知らぬ人々の共感を得ることができなければ自分の財を交換に差し出すことなどおぼつかない⁵⁾。見知らぬ人々の利己心だけを前提として相手をいかに説得するか、日々遭遇するこうした現実の中で、私たちは「交換性向」を育てているというのがスミスの見立てである。そうした「見知らぬ人々の集合」の中で、交換において、貨幣より先に「信用」が先行するなどということはいえない。「信用」というのは、本的には、見知らぬ人々間の「^{あいたい}相対関係」においてのみ成立するものであり、市場経済以前にさまざまな時代・

2) 「分業がひとたび完全に確立すると、人が自分自身の労働の生産物によって満たすことができるのは、彼の欲望のうちのごく小さい部分に過ぎなくなる。」(WNI.iv.1)

3) 「人々が、財を貨幣と交換したり、財どうしを相互に交換したりするにあたって自然に守るルールとはどんなものであるかを、これから私はすすんで検討することにしよう。こうしたルールは、財の相対価値または交換価値と呼ぶべきものを決定するのである。」(WNI.iv.12. 強調は追加) これが、『国富論』第I編の課題であり、そしてまたスミス以後の古典派経済学が継承した課題である。

4) 社会への貨幣の導入と近代社会成立とを同義と考えたステュアートは、やはり貨幣の導入を「欲望の一致の困難」に結び付ける:「欲望が増大してくると、物々交換は(明白な理由によって)ずっと難しくなる。このために貨幣が導入される。…われわれはまだ、その勤労によって交易を営む商人というものを登場させていない。この第3の人物を登場させてみよう。そうすれば活動全体が明らかになる。これまで欲望と呼んでいたものがここでは消費者として、勤労と呼んでいたものは製造業者として、そして貨幣と呼んでいたものが商人として現れる。」(Steuart [1767] 1998, I:198) ここで、2点注記しておく。第1に、スミスの場合は欲望の増大の裏には分業という生産の拡大が張り付いていたため、貨幣の必然性と同時に交換価値の決定論が必要とされたのに、ステュアートでは後者が見事に欠けている。第2に、この引用文での「商人」とは販売と購買とをマッチングする貨幣の人格的表現としての商人であって、譲渡利潤をめぐって互いに競争し合っている具体的な諸商人ではない。この引用文での『貨幣 money』が商人に代表されるという表現はやや奇妙な印象を与える(塩見 2018, 112) とする塩見は、概して、ステュアート『原理』第II編に具体的な商人市場を読み込み過ぎる印象を与える。

5) 社会と「見知らぬ人々」とが関連づけられている例として、例えば以下を見よ。「あなたは、逆境にあるのか。孤独の暗黒の中で嘆いてはならない。あなたの親しい友人たちの寛大な共感に応じて、あなたの悲哀を調整してはならない。できる限り早く、世間と社会の日光の中に、戻らなければならない。見知らぬ人々 (strangers) とともに、あなたの悲運について何も知らず、何も気を使わない人々とともに、暮らさなければならない。」(TMSIII.3.39. 強調は追加)

場所（共同体）・人間関係において存在したそうした「信用」とその工夫物とは、市場経済における貨幣と信用とは異質である。なぜなら、初期的に信用など構築しえない状況下で「見知らぬ人々」の共感を得るのは、絶対的価値物、絶対的流動性でしかないからである。

社会のあらゆる時代の世事にたけた人々は、分業が初めて確立された後、おのずから「欲望の二重の一致の困難」を次のようなやり方で処理しようと努めたに違いない。すなわち、世事にたけた人は、自分自身の勤労の特定の生産物のほかに、ほとんどの人「見知らぬ人々」が彼らの勤労の生産物と交換するのを拒否しないだろうと考えられるような、何らか特定の商品の一定量を、いつも手元においておくというやり方である。（WVI.iv.2. []内は追加）

4. 貨幣の3機能

以上の諸前提に基づいてスミスが描いた貨幣は、まず何より交換向けの商品として価値物でなければならなかったし、さらに、その場での消費のための交換ならいざ知らず、あらかじめ「いつも手元においておける」ような価値の貯蔵物でなくてはならなかった。こうしたスミスの貨幣論はその後の古典派貨幣理論の重要な出発点となった。貨幣とは何より交換手段でなくてはならない。そして価値の貯蔵ができるものでなくてはならない⁶⁾。

だが、計算単位（価値尺度）機能については、貨幣商品にとって二次的な属性に過ぎなかった。例えば、周知のようにイギリスの計算単位「ポンド・スターリング」は元々は銀の重量単位に由来した。本位としての金（gold）にとってはそれゆえ二次的な属性であった。

彼は彼がポンドによって言わんとしていることを定義するよう要求された。彼の答えは次のようなものであった。「それを説明することは困難ですが、イングランドのすべての紳士がそれを知っています」。委員会は質問を繰り返した。そこでスミス氏は次のように答えた。「それは、この国においてこの 800 年間——金が導入される 300 年前から——何ら変化せずに存在してきた何ものかです」。(Thomas Smith's reply to Robert Peel in the Secret Committee on the Resumption of Cash Payments in 1819, as quoted in Feavearyear 1963, 1)

計算単位としてのポンド・スターリングは、金が貨幣として用いられるようになる遙か以前から用いられていた。新たな経済的諸関係が依然として古い言語体系（古来の計算単位）によって記述されていたために、かえって計算単位の観念こそがそうした経済的現実の上位に独立してあるとの倒錯が生まれることになったのである。

⁶⁾ 'a double coincidence'(Jevons 1875, 3)問題を、人々がコストをかけて交換相手をサーチするモデルとして再構築された「交換手段としての貨幣」モデルは、マッチングの技術が進行するとともに、貨幣と物々交換とが市場取引の内部で共存できる可能性を強調する (e.g., Kiyotani and Wright 1993)。しかし、絶対的流動性としての貨幣はマッチング技術の次元とは異なる。

5. 観念的計算貨幣と表券主義

われわれの方程式 $P_{money/goods} = P_{money/gold} \times P_{gold/goods}$ によれば、国家は通貨 1 単位が本位をどれほど支配するかを規定できる ($P_{money/gold}$)。しかし、こうした法的規定は、それに先立つ長い経済的諸関係の発展の帰結 ($P_{gold/goods}$) の追認⁷⁾ではなくては有効とならない。観念的計算貨幣の支持者と目されるステュアートですら、こう述べた。

しかし現在、銀貨によるスターリング・ポンドは存在しない。イングランドには商業の流通に見合うだけの銀貨がない。したがって、ポンドを価値づける唯一の通貨はギニ貨である。(Steuart [1767] 1998, III:105; quoted in Ricardo 1951-73, III:32-33)

だが 19 世紀初頭には、貨幣が市場で生成してきた現実を無視して、法こそが通貨の価値を定めるとした観念的計算貨幣を主張した反地金主義者たちが、ステュアートを再興しつつ『地金報告』(1810) 批判を繰り返すことになった。(その後 19 世紀には古典派によって封印された) こうした観念には、上の T.スミスの証言に見られるようにきわめてアーカイックな響きがあり、そうした観念を 20 世紀初頭にギリシャ語・ラテン語を駆使して甦えらせた G.F.クナップへの以下のハイエクの評価には一理あることが認められねばならない。

…貨幣にほかの方法では与えられない価値をとにかく与えているのは国家であるとする中世的観念…今世紀において、*valor impositus* という中世的教義があのだイツの大いに崇拜されたクナップ教授によって復活させられたが、そのとき、1923 年にライヒスマルクを以前の価値の 1 兆分の 1 に下落させた政策への道が開かれたのである。(Hayek [1976] 1990, 37-38)⁸⁾

こうしたクナップの表券主義の現代の再評価に対しては、私は大きな違和感を禁じ得ない。

6. 交換比率か、価値の表現・形態か

私に言わせれば、過大評価されている S.ベイリーの古典派価値論批判 (Bailey 1825) は一部は古典派に対する誤解に基づく。スミスからリカードウへと至る古典派価値論は、何より交換価値の決定理論だったのであり、商品価値を不変の尺度で表現するというのはい部の誤った論者の主張であった。その一人は、スミス本人による『国富論』第 I 編第 5 章での労働尺度論だったが、さらにマルサスがそうした混乱に拍車をかけた。マルサス『経済学原

⁷⁾ 何が貨幣商品として一般化するかという長い過程についてのスミスの記述は本報告では周知と見なす。そのうえで、リカードウが J.ステュアートを含みおびたしい文献を踏まえて古来のポンドという計算単位を今や担っているのは金であると主張したこと、そしてやがて 1816 年のリヴァプール法によって金が正式にイギリス通貨の本位とされるに至ったのを目の当たりにすることになったことを確認されたい。

⁸⁾ *valor impositus* (= imposed value) は *bonitas intrinseca* (= intrinsic goodness) の対立語である。

理』の第2章は初版から第2版まで、諸商品の交換比率の決定問題をではなくて、価値の尺度（商品の価値を何で表わすか）を延々と論じているのであり、これは『国富論』の問題設定からの逸脱である。それどころか、『原理』第2版の編者J.カゼノウヴはマルサスを超えて、価値論において諸商品の交換価値を主題とするのは誤りで、商品を労働でいかに尺度するかが主題となるべきだとはっきりと強調した（Cazenove 1836）。こうした価値の「現われ方」「表わし方」に捕らわれた人々には、例えば、テュルゴ、テュルゴを引用した『経済学原理』におけるマルサス、さらには価値形態論におけるマルクスも含まれると言えるだろう。彼らは、貨幣論が交換価値決定論と不可分だとは見なしていない。ベイリー自身はというと、自らの貨幣論を展開する段となると、古典派の交換価値論と貨幣論との構成に従ったのである（Bailey 1837）。

REFERENCES（紙幅の都合により訳書の記載は割愛）

- Bailey, S. [1825] 1967. *A Critical Dissertation on the Nature, Measure and Causes of Value*. New York: Augustus M. Kelley.
- _____. 1837. *Money and Its Vicissitudes in Value, As They Affect National Industry and Pecuniary Contracts*. London: Effingham Wilson.
- [Cazenove, J.] 1836. 'Advertisement to the Second Edition' of Malthus's *Principles of Political Economy* in Malthus 1836, pp. vii-xii.
- Feavearyear, Sir A. 1963. *The Pound Sterling*. 2nd edn. Oxford: Clarendon Press.
- Hawtrey, R.G. 1928. *Currency and Credit*. 3rd edn. London: Longmans, Green and Co.
- Hayek, F.A. [1976] 1990. *Denationalisation of Money*. 3rd edn. London: The Institute of Economic Affairs.
- Jevons, W.S. 1875. *Money and the Mechanism of Exchange*. London: Henry S. King & Co.
- Kiyotaki, N., and R. Wright. 1993. 'A Search-Theoretic Approach to Monetary Economics'. *American Economic Review* 83.1:63-77
- Malthus, T.R. 1836. *Principles of Political Economy*. London: William Pickering.
- Ricardo, D. 1951-73. *The Works and Correspondence of David Ricardo*, ed. P. Sraffa. 11 vols. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schumpeter, J.A. 1954. *History of Economic Analysis*. New York: Oxford University Press.
- Seabright, P. 2010. *The Company of Strangers: A Natural History of Economic Life*. Princeton, N.J.: Princeton University Press.
- Smith, A. [1759] 1976. *The Theory of Moral Sentiments*. Oxford: Clarendon Press.
- _____. [1776] 1976. *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. 2 vols. Oxford: Clarendon Press.
- Steuart, Sir J. [1767] 1998. *An Inquiry into the Principles of Political Economy*. 4 vols. London: Pickering & Chatto.
- 塩見由梨. 2018. 「ジェイムズ・ステュアートの商業論」『経済学史研究』59.2:96-117.